

ケイ・タケイの作風について(Ⅱ)

細川 江利子

1. 研究目的及び方法

ケイ・タケイは、1967年に渡米後、1969年に「ケイ・タケイとムービング・アース (Kei Takei's Moving Earth)」を結成。以後、現在に至るまでNYを拠点に活動する日本人舞踊家である。このタケイの作風を明らかにするために、前回『ライト (Light)』を対象に作品批評文から考察した結果を報告したの続き、今回は『ライト、パート9』のVTR作品分析の結果について報告する。

2. 結果及び考察

(1) 『ライト、パート9』(初演/1975)の概要
上演時間-43分35秒(1985. 2. 22.中野サンプラザにて収録)

出演者-12名(F7,M5)<F:Female, M:Male>
人的構成:solo(F), solo(F6,M4)

音楽-使用せず

装置-背景に、四角い白い布(中央に穴が開いている)がかけられている。フロアにもそれと同型の白い布が敷かれている。

衣装・小道具-solo(F), solo(M), mass各々で形に違いはあるが、全員白いシャツ、パンツ、或るいはスカート。白い布の袋を持つ。

(2) 構造分析結果(次頁の図参照)

①4場面(I~IV)から成る。場面転換は、solo(F)が腕に抱えた白い大きな袋を落とす、その音をきっかけに、solo(M), massが背景幕の後ろに入り再び幕の下から出てくることによって行なわれる。

②使用空間は布上及びその外周に限られている。フロアパターンはIのmass, solo(M)を除き、すべて縦か横のライン上の動きである。

③solo(F), solo(M), massが存在する空間、動きは明確に区別され、並列的構造を形成している。しかし、頭のレベル、solo(M)の発話とmassの足音の関係等は、対比的に緻密に構成されている。

④solo(F), solo(M)は終始同じ行為を繰り返す。massのみが変化を見せるが、場面毎に見るとやはりフロアパターン、動き共に反復が基本となっている。

・solo(F)-フロアの布の周囲を四角く歩き続ける。袋を落とすと、それを拾い再び歩き続ける。

・solo(M)-場面毎に、15個の白い布の袋を抱えて背景幕の下からこがり出てくる。センター付近に位置し、'One cloth ball for a white ……'
'Two, one cloth ball for a white ……' … と言

ながら、布の袋を背景幕の穴の中に投げ込んでいく。…はwind, ocean, frog等特に脈絡なく上げられる。この行為を各場面15回、計60回続ける。

mass-Iでは全員が布の後ろ半面をランダムに動く。IIでは、4人のMが2人ずつ2組になり、布上の左右の縦ライン上を組毎に1人ずつ往復する。IIIでは、F6, M4の2群が布上を四角く前進し続け、各々約15周する。IVでは、F6, M4の2群が各々横一列に並んで、布の最後列-センターライン、或るいは最前列-センターライン間を前後に往復する。後半、センターラインで交差する度にFが1人ずつMの群に吸収され、最後には一群になる。

⑤全体の流れとしては、Iのランダムな状態から徐々に構成的になり、IVの最も転換が速く、構成にバリエーションが加えられた場面で盛り上げ、一気にラストの静止状態に持っていつている。

(3) 運動分析結果-massの動きを対象に-

(表は省略、発表資料参照)

massの動きは、歩行を中心にした前進運動が基本となっている。身体は必ず進行方向に向けられ、後退する動きは一つもない。

・場面I-ゆっくりした歩行から、運動部位が首→肩→腕・膝→体幹部へと拡がっていき、運動域も大きくなる。そして、再び逆のプロセスを通して動きが徐々に減り小さくなっていく。

・場面II-頭をセンターに向け、進行方向に身体を向け、腕と足を使って這うのみ。

・場面III-膝を軽く曲げた前進歩行を基本型に、そのバリエーション(足の動き:パラレル<基本型>-内股-外股/踏み足<基本型>-すり足)及び動きの加算(膝の屈曲、かかとのアップ・ダウン、ジャンプ等)によって15種類の足の動きが展開される。上半身は直立し、腕は背中荷物を抱えたまま変化しない。

・場面IV-足はIIIの基本型のまま、頭→あご→肩→腕・手→体幹部と運動部位を徐々に体幹部に近づけつつ、30種類の上身の動きが展開される。

3. まとめ

VTR作品分析の結果、パート9については、作品批評文より明らかにされた作舞の手法は実証され、かつより明確に掴むことができた。

「私達はパート1からパート8までの時代に別れを告げ……また別の何処かへと新しい旅を始めた」とタケイが語るパート9の、前進歩行と反復を基本とした構成・動きは、まさに「旅」そのものを無駄なく、シンプルに表したものとさえいよう。そして、その緻密な構成の中に、solo(M)の発話によるwind, ocean, frogといったことばの提示、全員が持つ袋等で具象性を加味し、観客に様々なイメージを湧き起こさせる作舞法といえる。

